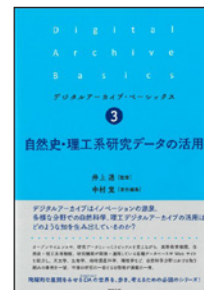




『デジタルアーカイブ・ベーシックス3 自然史・理工系研究データの活用』

井上 透 監修／中村 覚 責任編集
 出版者：勉誠出版
 2020年4月 240ページ A5判
 ISBN 978-4-585-20283-7
 本体2,500円＋税



本書は自然史・理工系分野におけるデジタルアーカイブの現状と課題を幅広く扱い、今後の方向性を示唆する優れたコンテンツを提供している。自然史・理工系分野の研究者ばかりではなく、異分野の研究者にも読んで頂きたい良書である。

本書は以下のように序論と3部9章から構成されている。序論：自然史・理工学デジタルアーカイブの今日的意義（井上透）。第1部 研究データの活用に向けて：第1章 科学データのデジタルアーカイブにおける必須条件「オープンデータ」（大澤剛士）；第2章 研究データ利活用の国際的動向—世界の自然史・理工学DA活用（南山泰之）。第2部 自然史・理工学DAの社会的活用：第3章 オープンサイエンスと天文学—現状と課題（玉澤春史）；第4章 自然史博物館×デジタルアーカイブ—オープンサイエンスを拓く一例としての魚類写真資料データベース（大西亘）；第5章 自然史情報のデジタルアーカイブと社会的問題への利用—地球規模生物多様性情報機構（GBIF）の機能とそのデータの活用（細矢剛）；第6章 環境学×教育—森の感性情報アーカイブ・サイバーフォレストを用いた環境教育（中村和彦）。第3部 自然史・理工系研究データの学際的利用：第7章 南方熊楠データベース—文理統合・双方向型デジタルアーカイブ（岩崎仁）；第8章 異分野融合で切り拓く歴史的オーロラ研究—オーロラ4Dプロジェクトの経験から（岩崎清美）；第9章 東京大学工学史料キュレーション事業の展開—工学・情報理工学図書館を実例に（市村櫻子）。

序論ではデジタルアーカイブの概要を簡潔に述べるとともに、自然史系博物館等におけるデジタルアーカイブの活動を手際よく紹介している。第1章では、デジタルアーカイブや科学にとって「オープンという考え方」や「オープンサイエンス」が重要であることを

指摘し、国内における科学データのアーカイブ（生物学分野を例として）に関する活動も紹介している。第2章では、研究データ利活用をめぐる国際的標準策定をめぐる動向を紹介するとともに、研究データ利活用に関する問題点を指摘している。

第3章では、天文学における巨大データアーカイブについて述べられている。天文学が扱うデータは巨大になり、国際連携がなければ有効に活用することは困難となっている。さらに、シチズンサイエンスとの協働事例も紹介されている。第4章では自然史博物館におけるデジタルアーカイブについて、魚類写真資料データベースを中心に紹介している。同データベースはシチズンサイエンスの好例であり、世界最大の魚類画像データベースとなっている（13万件超、毎年5千件の増加）。第5章では2001年に設立されたGBIFが10億件を超えるデータを提供するようになり、基礎生物学ばかりではなく、環境変動の解析にとってもデータ資源となっていることを述べている。第6章では東大演習林の定点から取得した長期観測データ（画像と音声）が環境教育やフェノロジー研究に大いに貢献することが紹介されている。

第7章では、南方熊楠が遺した多分野に渡る様々なデータのアーカイブ化・データベース化の成果と課題について述べられている。第8章では異分野連携の例として、歴史研究がオーロラ研究に貢献した事例が紹介されている。第9章では東大の工学史料のアーカイブ化のための組織構成やキュレーションの実態について述べられている。多くの章で述べられているが、日本のデジタルアーカイブを推進するためには、人材が圧倒的に不足している。アーカイブ化を行う専門職員が配置されなければ、日本は欧米に後れを取ってしまうであろう。

（国立科学博物館 松浦 啓一）



この記事の著作権は著者に属します。この記事はCreative Commons 4.0に基づきライセンスされます(<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>)。出典を表示することを主な条件とし、複製、改変はもちろん、営利目的での二次利用も許可されています。